

金字鍾著

長璋吉訳註

# 韓国現代小説史

龍溪書舎

金字鍾著  
長璋吉訳註

# 韓国現代小説史

龍溪書舎

### 著者略歴

1930年黄海道延白郡延安邑生れ。ソウル大学文理学部国文科卒業。進明女高、培花女高、普成高校教師、忠南大学助教授を経て、現在ソウルの慶熙大学教授の職にある。1957年評論により「現代文学」誌の推薦を受け文壇に登場。1956年韓国文人協会賞、68年8月灘文学賞受賞。著書に『韓国現代小説史』（66年）のほか『作家論』（73年）、『金字鍾エッセイ全集』6巻（71年）がある。

### 訳者略歴

1941年東京生れ。1965年東京外国語大学中国語科卒業。1968年11月より約1年半ソウル遊学。和光大学で朝鮮語を講じている。著書『私の朝鮮語小辞典』（73年）

住所 東京都墨田区太平4ノ4ノ4

## 金字鍾 著 韓国現代小説史

検印廃止

一九七五年三月二五日 第一刷発行

訳者 © 長 村 正 光  
発行者 北 村 正 光

発行所 龍 溪 書 舎  
東京都文京区千石 四一三二五  
電話〇三（九四三）四四四五  
振替口座 東京七六一二三  
印刷所 大 東 印 刷 所  
製本所 鈴 木 製 本 所

## 凡例

一、本訳書は、金宇鍾著『韓国現代小説史』一九六八年九月発行の初版本に、著者が削除、改訂を加えたものをテキストとして用いた。

削除、改訂は第Ⅰ章と第Ⅱ章に多く、第Ⅲ章では一部記述の訂正があるほかは著者による削除はほとんどないが、訳者の裁量にまかされて朴鍾和の小説からとった例文の一部を削除した。第Ⅳ章、第Ⅴ章ではほぼ字句の訂正があるだけで、第Ⅵ章は原著のままである。

削除をおこなったのは、第Ⅵ章の解放以後の記述を拡大、充実させるため、全体の分量を調節する必要がありますがあったからである。しかし、著者の事情のため第Ⅵ章の拡大は果たすことができず、原著のままとした。

二、巻末につけた註はすべて訳註であり、註の番号はアラビア数字に（ ）をつけて示した。本文中パレン内の註は原註である。

三、作品、論文はへゝで示し、雑誌、新聞、団体名、引用は「」、単行本は『』で示した。

四、作家名は漢字を先にし、（ ）内にカナで発音を付した。テキストでは作家名を雅号で書いている場合が多いが、訳書ではこれをフルネームの本名あるいは筆名になおした（例、春園→李光洙、ただし羅稻香の場合には、筆名羅彬、本名羅慶孫よりも羅稻香として広く知られているため、これを用いた）。とくに解放後北へいった作家たちのなまえは雅号だけで述べられるか、一字伏せ字になっている場合がほとんどであるが、これも訳者が右の原則にしたがってなおした。

作品の登場人物名は朝鮮語音に準じてカナで示し、場合によってはそのしたに（ ）にいれて漢字を付した。

目

次

# I 近代開化運動と新小説

## 一 登場時期およびその作家と作品 5～8

### (一) 新小説の登場 5

### (二) 新小説の主要作家と作品 6

## 二 新小説のテーマ 8～23

### (一) 新思想の波 8

- ①親日性と中国批判 8
- ②自由結婚観 10
- ③男女平等観 11
- ④向学心と教育熱 12
- ⑤民主政治観 13
- ⑥新文明の導入と批判 13
- ⑦独立思想、その他 14

### (二) あたらしい人間の発見 15

### (三) 古代小説から受けついだ旧套 18

- ①目的意識の露出 18
- ②非独創性と類型性 22

## 三 新小説のプロット 24～32

### (一) 変化した構成法 24

### (二) あたらしい構成法の文学史的意義 28

- ①技法の向上 28
- ②事件中心からテーマ中心へ 29
- ③世界観、人生観の転換 30

## 四 新小説の文体 32 ~ 45

### (一) 文体上の变化 32

- ① 韻文体から言文一致へ 32
- ② 漢文調からの脱皮 33
- ③ 故事・格言などの廃棄 34
- ④ 誇張・比喩の止揚 35
- ⑤ 過去回顧形からの脱皮 36

### (二) 新文体の文学史的意義 37

- ① 本格的文学形態 37
- ② 内容の実質向上 38
- ③ 民族的主体性 39
- ④ 文学用語の発掘 40
- ⑤ 事件の無理、構成の公式性からの脱皮 41
- ⑥ リアリティ 42
- ⑦ 今日の「現実」 43
- ⑧ 実話からフィクションへ 44

## 五 新小説の終焉と李人植 45 ~ 51

### (一) 近代文学の旗手、李人植 45

### (二) 李人植の運命、新小説の終焉 47

- ① 政治的過誤 47
- ② 読者の後進性 48
- ③ マスコミの後進性 49
- ④ 時代思潮への反動 50

## II 李光洙と民族文学

### 一 時代的背景と李光洙の経歴 53 ~ 57

- (一) 一九一〇年代の風潮と李光洙 53
- (二) 李光洙の作品経歴 56

二 短篇の登場 58 ~ 69

(一) 一九一〇年頃の習作と問題作 59

① 〈無情〉と〈献身者〉 59      ② 〈幼き犠牲〉の問題点 62

(二) 一九一七年頃の習作 65

① 愛情の革命 65

(三) その後の短篇と文学史的価値 68

三 長篇小説〈無情〉の思想と技巧 70 ~ 87

(一) 〈無情〉の主題 72

① 結婚観の革命 72      ② 主題の近代的意義 76

(二) 〈無情〉の技巧 77

① 近代小説的文体の形成 77      ② 性格表現の実験 78      ③ リアリズムの技巧 83

四 民族主義と李光洙の運命 87 ~ 99

(一) 民族主義文学の方法論 87

(二) 李光洙の民族主義 90

(三) 先駆者としての巧績と民族への背反 95

### III 芸術至上派と同人活動

一 芸術至上派の新進たち 101 ~ 112

(一) 時代的背景 101

① 日本留学 102      ② 教育機関新設と新世代 103      ③ 日帝弾圧と民族的自覚 104

(二) 三大同人グループと芸術至上論 106

① 「創造」派の活動 107      ② 「廃墟」派の活動 109      ③ 「自潮」派の活動 110

二 自然主義と耽美主義（金東仁） 113 ~ 149

(一) 経歴 113

(二) 二〇年代初期の文体運動の功過 116

① 簡潔性と卑語（文体の特徴） 116      ② 「다라」形・代名詞・方言 121

(三) 初期短篇の水準 134

① 初期作品の未熟性（〈弱き者の哀しみ〉など） 134      ② 〈へじやがいも〉以後 137

(四) 自然主義と悪魔的耽美主義 140

① 盲目的否定と虚無 140      ② 権威への挑戦と自然主義 142      ③ 悪魔的耽美主義 145

三 廉想渉のリアリズム 149 ~ 170

(一) 経歴 149

(二) 象徴的推理分析と〈標本室の青がえる〉 153

(三) その後の手法の一般的傾向 156

- ①主観性の排除 157 ②描写過剰の盲点 158 ③用語の円熟性 162  
 リアリズムと主題の貧困 164

- ①初期作品と否定的人生観 164 ②その後の四〇年間の作品世界 165

#### 四 民族の哀しみとリアリズム〈玄鎮健〉 170 ~ 189

#### (一) 経歴 170

#### (二) 民族の哀しみ 172

- ①労働者の悲哀〈運のいい日〉 173 ②知識人の悲哀〈酒を勧める社会〉 175  
 ③父親の悲哀〈私立精神病院長〉 177 ④少女の悲哀〈火事〉 179 ⑤流浪民の悲哀〈故郷〉 181 ⑥民族的受難の告発 184

#### 五 浪漫的民族意識(朴鍾和) 190 ~ 202

#### (一) 経歴 190

#### (二) 歴史小説の登場 192

- ①李光洙と朴鍾和の歴史小説 192 ②〈首をくくる女〉の歴史小説的性格 193

#### (三) 手法の一般的傾向 194

- ①正史に忠実であること 194 ②宮中用語の発掘 195

#### (四) 浪漫と民族意識 197

- ①浪漫的叙事詩〈アランの貞操〉その他 197 ②民族意識の発露〈待春賦〉その他 200

#### 六 素朴な人間像(田栄沢) 202 ~ 208

- (一) 経歴 202
- (二) 素朴な人間愛と写実性 204
- (三) 作家の謙虚 206

#### 七 浪漫とリアリズム（羅稻香） 208 ~ 221

- (一) 経歴 208

- (二) 習作期の浪漫主義 210

- (三) ①幼稚な浪漫（『幻戯』その他） 210
- ②技巧の未熟さ 213
- 成熟期のリアリズム 216

- ①現実追求（『傭人の子』その他） 216
- ②階級的な人間関係（『啞の三龍』その他） 220

### IV プロレタリア文学とアンガージュマン

二三三——二三二

#### 一 プロレタリア文学の登場過程 223 ~ 232

- (一) 李光洙の芸術至上派批判 223
- (二) 金基鎮とバルビュス思想 227

#### 二 プロレタリア文学運動の三段階 232 ~ 238

#### 三 プロレタリア文学の作家と作品 238 ~ 259

- (一) 貧窮と反抗（崔曙海） 238

- ①経歴 238
- ②プロレタリアートの反抗 241
- ③思想の未熟性 247

(二) その他の作家・作品 250

- ①李箕永の小説 250
- ②金基鎮の〈あかい嵐〉その他 251
- ③朴英熙の小説と変節 255
- ④〈人力車夫〉と朱耀燮 253
- ⑤〈移郷〉と李益相 255
- ⑥〈洛東江〉と趙明熙 257
- ⑦その他 259

四 民衆のためのアンガージュマン 259 ~ 262

## V 純粹文学と逃避意識

一 時代的背景 263

- (一) 日帝軍閥政治の強化 263
- (二) 出版事業の隆盛 265

二 文壇変貌の五大様相 267 ~ 276

- (一) 主潮の空白 267
- (二) 各個の分散活動 268
- (三) 純粹文学の全盛 270
- (四) 大衆文壇の形成 272
- (五) 無能派の淘汰と世代交替 273

三 一九三〇年代の主要作家と作品 276 ~ 334

(一) 純粹と逃避 (李泰俊) 276

- ① 略歴 276      ② 敗北の人間型 278      ③ 歴史不在と思想の貧困 281      ④ 「純粹」の旗手 283

(二) 純粹と愛欲美学 (李孝石) 287

- ① 略歴 287      ② エロチズムと自然主義 288      ③ 言語芸術の名匠 292

(三) インテリの偽装逃避 (俞鎮午) 296

- ① 略歴 296      ② カメレオンの哀愁 (金講師とT教授) など 297

(四) 農村文学 302

- ① 農村へ 自然へ 302      ② 〈棉の種を蒔くとき〉 (朴栄濬) 305

(五) 土俗のリリズム (金裕貞) 307

- ① 〈椿の花〉の抒情 307      ② 〈旅の女〉 309      ③ リリズムの虚点 311

(六) 愛情の倫理 (崔貞熙) 312

(七) セックスへの逃避 (李箱) 314

(八) 「神堂」への逃避 (金東里) 318

(九) 失名氏作品 321

- ① 世態小説 (〈大河〉その他) 321      ② スタイリスト (小説家仇甫氏の一日) など 322  
③ 蟄居と反芻 (〈古物哲学〉その他) 324

(十) その他の諸作家と作品傾向 326

# VI

## 祖国解放と今日の問題

三三七——三四七

① 金明淳・朴花城、その他の女流作家 327

② 方仁根・鄭飛石、その他の大衆作家 329

③ 純粹系列のその他の作家 331

四 純粹文学の功過 334 ~ 336

一 日帝最後の暗黒文壇 337 ~ 341

(一) 「朝鮮文人協会」結成と作家の動向 337

(二) 時局講演と皇軍賛歌 339

(三) 文壇の終幕 340

二 解放と今日の文学 341 ~ 347

(一) 八・一五の文学史的意義 341

(二) 団体活動と印刷文化の復興 343

(三) 当時の混乱と今日の問題 345

注 釈

あとがき

三五——四四一

四四三——四四四

## 序論 近代化のアイロニー

一九世紀末葉は、わが国が久しい冬眠のなかから目覚める、もっともあわただしい季節であった。この季節とともに、この地にはじめて近代文明が孕まれることになった。しかしながらその懷妊は、実に奇妙な歴史的アイロニーの過程のなかでなされたものであった。

近代史を語るとき、われわれはあの東学乱<sup>(1)</sup>を忘れることはできないであろう。官僚と特権階級の横暴に憤怒し、果敢に掲げた抵抗の旗幟——この素手で立向う庶民の氣勢におされ、政府軍が清国の応援を要請したのは、一八九四年五月のことであった。そこに日本軍が介入してきた。日本人居留民を保護するためということ、清国兵の進駐は韓国の独立をおびやかす恐れがあるため、座視できないというのが口実であった。そうして、日本の兵力がソウル・仁川間に投入されることによって、韓国をめぐる掠奪戦が展開され、ついに、日本が覇権を握ったのが、同年六月の日清戦争であった。数一〇〇年、いや、一〇〇〇年、二〇〇〇年の間、われわれを抑えてきた中国は、ここにいて、その無力を如実に露呈してしまったのである。それ以来、わが国の事大主義が徐徐に方向転換のきざしを見せはじめたことは、言をまたない。

しかし、中国の軍事的な敗北は、わが国から中国の影響力が完全に去勢されたことを意味するものでは決してなかった。韓国はまさしく、山河もその姿を変える久しい歳月を、政治、軍事ばかりか文化的にも、巨大な中国大陸の気圧圏の中で生きてきたのである。したがって、いくら日清戦争が日本の勝利に帰したからといって、韓国に植えつけられた中国の文化的勢力を根こそぎにしない限り、日本にとってこの植民地に対する恒久的な独占は、決して保障さ

れないものであった。いいかえれば、中国の文化的勢力が残存する限り、日本の軍事力が弱まれば、中国の軍事的、政治的勢力が、それに反比例して再び復活する可能性があることは、あまりにも明らかなことであった。したがって日本は、もうひとつの日清戦争をたたかう必要があった。あらたな文化を導入し、中国の伝統的な文化と対決させることによって、それを完全に崩壊させる戦争——これがすなわち、軍事的な戦争とともに同年同月に敢行された甲午改革であつた。<sup>(2)</sup>こうして、この緻密な侵略方法論はみごとに的中し、日本人に今度は文化的な勝利者の榮譽を与えたのである。そのときから、この地では中国の陳腐な文化的勢力は縮小し、あらたな文化の風土が熟しはじめたのである。

ところでこの近代化は、われわれが自発的に要請するまえに、他律的に強行されたものであった。すでに、軍事的な勢力に抑えられた韓国としては、甲午改革が趣味にあおうがあらまいが、拒否するすべはなかった。のみならず、久しい鎖国政治のため、後進国になってしまった韓国としては、また、久しい伝統を蹴って、この新しいお客様を自発的に迎え入れざるをえない、奇異な実情におかれていたのである。韓国の近代化は、このように、自意半分、他意半分の奇妙な姦淫形態のもとになされたものであった。のみならずそれは、韓国がふるい世界をとび出して、燦爛たる新文明の海に向って、はじめて進水する信号でもあったのであり、この点、多分に祝福の意義を内包していた。そしてまた一方、それは韓国を恒久的に植民地化しようとした副産物にすぎないものであり、この点においては、まことに呪うべき意義をも内包していたのである。したがって、半強制、半自意の姦淫形態によって懷妊したわが国の近代化は、呪咀と祝福とが野合した混血兒的意義をになっているものであった。

わが国の現代小説（二〇世紀小説）は、まさにこの怪異な歴史的運命の蔭のもとに成長してきた。だが、祝福された領土のみが、すぐれた文学を生み出すわけではない。人間は、侮蔑と虐待のかなしい涙を下肥としたとき、かえつ

てより偉大な靈魂の実を結ぶ樹木ともなりうるのである。こうして結実した靈魂は、夜空の星のように暗ければ暗いほど、いっそう光を増して輝きもするのである。それゆえ、韓国文学は、日帝の虐待のもので痩せおとろえたことも事実だが、そうした文学だけが、その時代の遺産のすべてでは決してなかったのである。